

## 第3章 教育

### 挨拶

以前は、保育園の子供たちを引率して散歩している所に出会うと、私とは面識のない先生たちが明るく「こんにちは」と声をかけてくれ、その声につられて子供たちも元気に「こんにちは」と声を出していました。

ある日、向こうから散歩帰りの保育園の集団が来ました。そろいの黄色い園服に黄色い帽子を被っています。その可愛さに、思わず「ヒヨコちゃんたちバイバイ」と手を振りました。

すると、最年長の先生が飛んで来て、「あなた、どなた？ 園児との関係は？」と聞かれました。私は予想していなかった言葉に驚いて、受け答えができませんでした。そして、その場を逃げるように去りました。

最近、幼児の誘拐や殺害という悲惨な事件が頻繁におきています。用心のため他人に声をかけないようにしているのでしょう。親しくなって、殺されてしまっは大変です。先生には、子供の命を守る責任があります。これからの社会は、子供を育てるのは難しい。

### 短い会話

テレビで、「最近の夫婦は会話がない」という放送をしていた。夫婦の会話は三分も続かないのだそうだ。それを夫に話すと、「山形には世界一短い会話がある」と言い出した。それは食事時の夫婦の会話。「け」と「く」。奥さんがテーブルに食事の支度できたので「け」と言う。つまり「召し上がれ。食べなさい」と言う。続いて夫が「く」

と言う。つまり「いただきます」だ。私は、あきれた。そして爆笑した。一般的に「け」は「けっこうです。(いりません)」とか、「けっこうでした。(おいしかった)」と使う。「く」は「食いましょう(食事にしましょう)」「(食事を)ください」。だから、「く」が先で、「け」が後なのではないか？　すると「山形弁を知らないと、これは理解できない。山形の人でも知らない人がある。タレントのダニエル・カールの家では使っていると思う」と夫は言った。この話は論争となり、一日続いた。

## 長話

校長の話ほどつまらないものはない。なぜ、つまらないのだろう。それは長いからです。長いと大切な話でも覚えられない。どの部分を覚えていいのかわからない。しかし、短ければ覚えられる。

夫の高校の時の校長の入学式の挨拶は、いたって簡単だったそうだ。「初心忘るべからず」。たったそれだけだった。短い挨拶だったので、今でも覚えているそうです。

私も、小学生の時、新任の校長が「私の名前は、テルテル坊主の輝です」と言ったのを覚えている。全校生徒が笑って、全員がその場で覚えた。娘が同じ小学校に入学したので、校長室をのぞいてみると、歴代の校長の写真が飾ってあった。そして鈴木輝校長の写真もあった。その写真の顔は懐かしかった。

今、人気の幼稚園をテレビで紹介していた。テレビ番組表には『天才児作る横峰式教育の卒園式』と書いてある。その園長の送る言葉に注目した。

「みんな、これから言う事が守れるかな。三つあります。一つ、嘘はつかない。二つ、お父さんお母さんの言うことをきく。三つ、勉強をする。」そして、園児に復唱させ、園長の送る言葉は五分ほどで終わった。内容は、園長の挨拶によくあることで珍しく

ないが、感動的に短くまとまっていた。人気の秘密が納得できた。

私は幼稚部から大学まである私立の学園の中学部で三年間を過ごした。学園長の話は長かったが、繰り返される話は体験談であったため、力がこもっていた。教員の中には、「いつも同じ話だ」と批判的な人もあった。繰り返し同じ話ができるのは、ウソでない証でもある。

私が覚えている言葉は「人の嫌がる事を率先してやる人となれ」というものです。これは、この学園のモットーでもあるので、繰り返し話題になった。当時は、嫌な事は自分もしたくないと思っていたが、今では実践している。人の嫌がることを率先してやり、手本となるのです。好い言葉だと思っています。これから高齢になり、私は若い人の手本になる生き方をしたい。気が付けば、「人の嫌がる事を率先してやる人となれ」という教訓も短く覚えやすい。話は長ければ好いというものではなく、聞く気持ちのある人には一言でいいのです。

バンクーバー冬季オリンピック開会式をテレビで見ていると、会長の挨拶は長く、大あくびをしている日本の選手があった。日本選手を非難する必要はない。夫も「長い挨拶だね」とあきれていた。

## 叱って、ほめる

教育の現場では、常に「叱る」と「ほめる」が話題になる。

中学部の入口には柿の木があった。毎年みごとに実をつけた。すると朝礼で中学部長が話された。「今年も柿の木に柿が沢山なった。これは渋柿だから観賞用にする。採ってはいけない。来客が見て喜んでくださると思うから」。生徒らは「はい、わかりました」と答えた。

この中学部は、日本だけでなく海外からも全人教育の視察者が絶えなかった。私は講演で訪れたシュバイツァーの娘に花束を渡す役をしたことがある。娘といっても老女だったが。シュバイツァーの娘の講演は、映像だった。深夜、シュバイツァーがオルガンで讃美歌を弾いていた。その音色はジャングルに響き、人々の心を癒していた。主食は椰子の葉に包んだバナナを熱した石で蒸したものだ。「本物を子供たちに見せたい」「教育には金をかけるものだ。教育に金をかけなくなったら国が亡びる」というのが学園長の教育方針だった。

さて翌日、柿は木から全部なくなっていた。部長が言われた。「昨日、柿は渋柿だから観賞用にする。採ってはいけいと言ったはずです。採った者は、前に出て来るように。」すると、一年生から三年生までの男子がぞろぞろ、ほとんど前に出て来た。その人数の多さに部長は驚いていた。みんなで一斉に採ったのではなかった。一人が帰りがけに一つ、二つと採って帰ったのだ。

部長が言われた。「正直でよろしい。渋かったらろう。」みんながうなずいていた。柿の実事件は、私が在学中、毎年続いた。この中学部の近くには柿生という地名があるほど柿の木が多かった。

柿の実事件と同じように初夏になると筍事件があった。こちらは、隣接する他人の竹林なので問題は大きかった。中学部長が言われた。「今年も東側の下の竹林に筍が生えました。持ち主が大切にしているものです。竹林に入ってはいけい。」生徒らは「はい、わかりました」と答えた。

翌日、部長は怖い顔だった。「昨日、竹林に行ったものは、前に出て来るように。」すると、一年生から三年生までの男子がぞろぞろ、ほとんど前に出て来た。その人数の多さに部長は驚いていた。「それで、面白かったのか？」と聞かれた男子が、「蹴飛

ばしたら足が曲がりそうに痛かった」とか、「手で掘ったから血が出た」など、さんざんだった話をした。中には「かじったら、うまかった」と言った子もいた。部長が言われた。「正直でよろしい。しかし、他人の家の物だから、放課後、全員で謝りに行くように。」みんながうなづいていた。泣いている子もいた。筍の事件も毎年続いた。毎年、めちゃめちゃにされた竹林の持ち主は、さぞ困った事だろう。

中学部は、丘の上のドングリ林の中にあった。小田急線のトンネルの上の木造の古い校舎で、教室にピアノがあり、自由に誰でも弾く事ができた。朝も昼も帰りも歌を歌った。生活の中に歌があり、歌に明け暮れた。私は、ここで沢山の歌や讃美歌を覚えた。

中学部長の岡田陽先生が作詞された歌が、高校の教科書(『音楽』(教育出版)昭和49年発行)に掲載された。私は、音楽大学を卒業すると鎌倉にある私立の女子大学附属の中学と高校で音楽主任をした。全校生徒に、この歌を教えた。生徒が「よい歌だ」と言って歌ってくれた。生徒と一緒に歌いながら、私は中学一年の夏、母と歌ったことを思い出していた。数少ない母との思い出の曲でもある。

### 小さい花

作詞 岡田陽

作曲 柳沢昭

一、ちさい花 はこべの花 お母さんの花

野原に そっと咲いて

いつも ぼくを見てる花

ちさい花 はこべの花 お母さんの花

二、ちさい花 はこべの花 お母さんの花

清らに そっと咲いて

いつも やさしく笑(え)まう花

ちさい花 はこべの花 お母さんの花

## 誤解

### 「<sup>はき</sup>覇気がない」の誤解

中学部の時の運動会は、幼稚部から大学まで学園合同で行われた。『花笠音頭』を、さんざん練習させられて踊ったのを覚えている。

「そのグループに踊れないヤツがいる。そのグループだけやってみろ!」と、体育の先生に怒鳴られたのは、私のグループ。踊れなかったのは私だった。自分だけで、勝手に踊るのは、小さい頃から大好きだったが、みんなと同じに踊るのは苦手だった。第一、振付の順番が覚えきれない。覚えたくもなかった。運動会本番も、友だちの踊りをまねて踊った。面白くもなんともなかった。

全校生徒の中、自分のクラスが指摘されたのを見た気の小さい担任は、青くなっていた。放課後、クラス全員、下校時間ぎりぎりまで残され、いつまでも、くどくどと説教をされた。今から思えば、五百人もいる全校生徒の中で、一人の踊れない生徒を発見した体育の教師はすごい。偉い。目立って踊れなかった私は、よほどダメだったに違いない。そうとう目立っていたのだろう。

私は、やる気がなかった。担任から「お前は、覇気がない」と言われ、成績表に「覇気がない」と書かれた。具体的な指導はなかったので、それで終わった。学校にいる間、親代わりとなる信頼すべき担任から「覇気がない子」と決めつけられた生徒の立

場はどうだろうか。気分よく言い放った担任とは心を開いて話す事は一度もなかった。私は中学時代、笑うことがなかった。楽しい事がないままに三年間が過ぎた。目を伏せ、だまって下を向き、おどおどして重く長い三年間が過ぎて行った。丘の上の空は、いつも青く、清々しかったのに、思い出は灰色に塗り込められている。過ぎた日は思い出したくもない。

結婚して夫にこの話をする、「その担任はどうかしている。それは誤解というものさ。あなたに覇気がないのなら、他の覇気のない人は、どうなるんだ。生きて行けない」と言った。

一九六四年、東京オリンピックがあり、一九六六年、ビートルズが東京に来た。テレビは「コークと呼ぼう、コカコーラ」を連呼し、一ドルが三六〇円の時代だった。「子供には本物を見せたい」との学園長の配慮から、中学部には東京オリンピックの入場券が配布された。私には乗馬の入場券が当たった。乗馬には興味がなかったし、場所がわからなかったので行かなかった。その入場券は中学部に配布された、たった一枚だったので、担任は烈火のごとく「わかっているのか!」と怒った。私には、何もわかっていなかった。

ビートルズが流行し、ビートルズグッズやビートルズ特集の雑誌を持っている子も多かった。「私はリンゴがいわ」「私はポール」という会話が目の前を通り過ぎて行った。当時の私は「リンゴってなに?」といった程度だった。ポケットティッシュ、クロワッサン、シュークリームを初めて知ったのも中学部の時だった。

生徒の間では「やーねー」という言葉が頻繁に使われていた。私に対してであった。彼らは裕福な家でわがままに育った集団だった。帰宅して母親に学校の様子を話すと、『「いやですね」と言えばいい』と言われた。家では学校の事は話さなくなった。

今では級友の顔も名前も忘れている。

田舎で育った私は東京に出て情緒が著しく不安定になっていた。孤独だった。いか  
がわしい新興宗教も時折近づいて来たが、入ってしまわなかったのは、中学部がキリ  
スト教系の学園だったからに他ならない。週に一回、礼拝の時間があった。聖書を読  
み、讃美歌を歌った。私は、この時間が一番嫌いだった。私は今も宗教を持っていな  
い。

しかし、私の中からキリスト教の教えが消えることはない。いつも、ついてまわっ  
ている。多感な時期の教育がいかに重要か、その後の人生に消えることなく大きな影  
響を与えることを物語っている。

### 「スケッチ」の誤解

絵を描いたり、美術館へ行って絵の鑑賞をするのは好きだった。中学の生物の時間  
に植物細胞のスケッチの授業があった。きれいに描き上げたスケッチを一番に提出し  
て満足だった。

しかし、私だけが描き直しだった。D評価をもらったスケッチを手に呆然と立ちつ  
くした。理由がわからなかった。色鉛筆で色を付けたためだと知って、さらに愕然と  
なった。その日から、あれほど好きだった生物が嫌いになり、絵を描かなくなった。  
さらに、細かい事を言う生物の教師に対し、全ての事で反抗的になった。その先生が  
担任だったのだから、中学生生活は最悪だった。だれとも話をしなくなった。

それから四十五年後、生物の教師の夫に、この話をすると驚く返事が返ってきた。  
「細胞のスケッチは、色を付けてもかまわないが、基本的には細胞の形を観察するの  
だから色は付けない。スケッチの前に、先生が説明をしたはずだよ。しっかり聞いて  
いなかったんじゃないの」。私は、「そうだったのか」と思ったが、すでに後の祭りだ。



す。友人からきれいに描けた絵手紙をもらったりすると、中学の時の細胞のスケッチが蘇えるのです。

## 教育の現場

千葉市内の小学校の先生が、研究授業で「どんぐりころころ」をやるというメールが来た。「子どもたちに、三番を創作させて、歌わせたらどうか」とアドバイスした。

母も、小学校の先生でした。研究授業というと、自分の子供のことは忘れて、模造紙に図を書いたりして、本当に一生懸命でした。

昔の先生には、「自分の教え子を再び戦場に送るな!」というスローガンがありました。だから日教組は安保反対闘争に全力で取り組んだのです。学校に行かなくても、インターネットで何でも学べる時代、今の教師に何ができるのだろうか。

## 先生

### 「昔」の先生

父と母は小学校の教師をしていました。現在(平成二十二年)、共に九五歳です。今でも曾我国民学校の頃の一年生の時の生徒が入学式の集合写真を持って来てくれたり、松田小学校、富水小学校の時の生徒から年賀状をいただいたりします。「右も左もわからない私たち1年生に優しく丁寧に教えていただき・・・」と感謝の言葉が書いてあったりします。退職してからすでに長い年月が経っていますが、今でも尊敬の念を込めて「先生」と呼ばれています。「昔、先生の家遊びに行った」と言っている人も何人もあります。今、学校の先生の家、生徒は遊びに行ったりするのでしょうか。

### 「ピアノ」の先生

先生にもいろいろある。ピアノ教室の先生はどうだろう。私が教わった先生は、ピ

アノの弾き方を教えるだけだった。その曲がある程度弾けたらマルを付けて終わりだった。一つも楽しい事はなかった。教育的な教えを受けた覚えは全くない。

さらに、私はピアノの先生に顔を平手で殴られて、椅子から転げ落ちた事がある。仰天しただけで、涙が出なかった。私のピアノの練習は、いい加減で、先生の指導の通りに弾くことはなく、レコードを聴いて、弾きたい曲を選び、「こうかな」、「ああかな」と好きに弾き、それで自己満足し、先生の家で自分で気に入った楽譜を持ってレッスンに行っていたのだから、先生が怒るのは当然と言えば当然であった。

音楽大学に合格すると、母と一緒に、みかんの箱を持って御礼の挨拶に行った。先生の家は、小田急線の玉川学園前駅の丘の上にあった。母が、「おかげさまで・・・」と挨拶すると、「よく受かったわねえ」と言われた。「みかんの箱は、玄関の、その辺に置いて」と言われた。

後日わかったことだが、この年この先生のピアノ教室からは、私だけが合格し、他の生徒は不合格だった。東北や沖縄からレッスンに通っていた生徒も全員不合格だった。正月を返上して合格しそうな生徒が呼ばれて特訓があったそうだが、私は呼ばれていなかった。最初から省かれていた。その私だけが合格したので、先生は怒っていた。みかんをぶつけて返すぐらいの勢いであった。

私は、音楽大学を卒業するとピアノ教室の先生になった。最初は、自分が教わった先生たちの真似をして教えていたが、しだいに指導の研究会に出て勉強をした。アメリカやフランスの外国の教材の勉強もした。結局、どの楽譜を使っても目指す所、行き着く所は同じだと思った。

それからは、生き方を教える音楽教育に徹することにした。一人一人と向き合って話をした。「おしゃべりばかり。はやく弾こうよ」と言う子も出て来たが、それは私が

目指すピアノ教室のあり方だった。バイオリンを弾いてみせると、バイオリンを買ってもらう子が出たり、足柄上郡の小学生自転車大会で自転車の免許証がもらえる話をすると夏休みにその大会に出た子もあった。私のたわいない話から、どんどん子供の視野や興味が広がっていった。

私は、面白くてピアノ教室に情熱を傾けた。教室はピーク時には七十人もの生徒がいた。教えるのが間に合わなくて、土曜日や日曜日は一日中。昼食は作りながら立って食べるようだった。生徒の親も毎回見学について来て熱心だった。親ともよく話した。感謝の印にと御中元や御歳暮もいただいた。中には、漬物や赤飯、干柿を持って来る生徒もいた。生徒の中には「先生と出会って母の考え方が変わって、よかったと思います」と言う子もあった。人とかかわる教師は生き方を教えなければならない。ピアノ教師も同じだ。

ある日、「音楽大学を受験するか、普通の大学を受験するか、迷っています」と相談に来た親があった。この親の子は、小さい頃から『NHKみんなのうた』のテキストを毎回買ってレッスンに来た。学校でも先頭に立って歌ったりピアノを弾いたりしていたようだ。音楽が大好きだった。私は「ピアノは趣味でも続けられます」とアドバイスした。彼は、小田原にあるトップの進学校を卒業し、東京の国立大学に合格した。ピアノ教室には大学の寮に入るまで来ていた。卒業すると商社マンになった。

しかし、しだいに状況が変化した。父と母の介護が一番の理由で、付き添いの病院から帰ってみると、生徒が待っていたりする事が頻繁になった。私はピアノ教室をあっさりやめた。

二番目の理由は、家々が接近して立ち並びはじめると、各家庭ではピアノに代わり電気ピアノでヘッドフォンをつけての練習になった。『エリーゼのために』が弾けるほ

どになったので、「ペタル」の使い方を教えても、「家のピアノと違う」と言う子が現れた。これではピアノの教えがいが無い。それでピアノ教室をやめた。

夫が「高齢者の時代だから、高齢者にピアノを教えたら」と言ってくれたが、子供でも、高齢者でも同じです。私はお金のためにピアノ教室の先生を再開するつもりはありません。そこにはピアノ教師としてのこだわり、プライドがある。

## 余談

余談は時として良い事も悪い事も鮮明によみがえるものです。

### 「音楽の先生」の余談

深夜、NHKの台風情報を見ていた。天気予報は「高波に注意」「高波が襲って来ます」と「高波、高波」を繰り返していた。中学の音楽の先生の言葉が思い出されて笑ってしまった。その音楽大学を卒業したばかりの若き教師は授業中にこう言われた。「僕は、天気予報を見ていると、いつも驚きます。『高波に注意』とか、『高波が襲って来る』とか言うからです。僕は何も悪くありません」。その時は何ともなかったが、後になって天気予報を見るたびに笑った。先生の名前は、<sup>たかなみ</sup>「高浪」といった。

この先生は、後に国立音楽大学に招かれて教鞭をとり、教授になるのだが、それほど偉い先生の授業だったのに、私は中学の時の音楽の授業は、この天気予報の余談しか覚えていない。何か他に教わった事を思い出そうと、長年考えたが思い当たらなかった。

しかし、先日「これほど偉い先生に教わったのに余談しか覚えていない。みなさんも経験があるようですね」と、私が主宰する童謡の会で話して、笑いを取っているうちに、重大な事に気がついた。音楽の楽しさ、歌う事の喜びを教えてもらったではな

いか。そして、今、それを自分が童謡の会で実践している。それに気づいた瞬間、ありがたいと感謝した。中学を卒業して四十年以上も経っていた。

私が卒業した中学は音楽の授業以外にも毎日、朝も昼も帰日も歌った。生活の中に歌があった。私は今、だれよりも、その教育を実践している。

「運動の後に、毎回サークル全員で、先生の歌の本を使って歌っています」「金時山に登山して、みんなで歌いました。気分爽快でした」「先生の作られた歌の本で、グループホームの皆さんが歌っています。しっかり歌えています」「敬老会でも、おいに歌いました」「私は旅館を経営しています。お客様と歌っています」。いろいろな歌の便りが届きます。うれしいことです。

### 「社会科の先生」の余談

高校の時の世界史の先生は一橋大学の教授で、講師として私の高校で教えておられました。

二学期が終わっても、教科書が全く進んでいませんでした。生徒は、何とも思っていないかもしれませんが、先生があせり出して、ある日「世界史は、そのかかった日数ぶん学ぶのに時間がかかる」と言われました。私は、その一言に感動しました。

世界史の参考書は三種類くらい買って読んだ。カラーページで世界の遺産が紹介しており、地図もついていて面白かったのを覚えている。しかし、授業内容は、その先生の一言だけが記憶にあるだけです。私は、太宰治にそっくりな世界史の先生も、世界史も大好きでした。

### 「生物の先生」の余談

マーケットに買物に行くと、何でも安いものを買います。それは、主婦なら家計のことを念頭に置いて誰でもすることです。しかし、私は肉だけは高いものを選びます。

高校の生物の先生が授業中に「肉は値段の高いもの、上質の肉を食べるのがよろしい」と言われたからです。値段の高い肉は、ピンク色で、いかにも美味しそうです。体にもよさそうです。理にかなった言葉です。

生物の先生は、有名な蜘蛛の学者で、ラジオの電話子供相談室の回答や、テレビにもゲストで何度も出演されました。すでに亡くなりましたが、肉を買うたびにこの言葉を思い出し、値段の高い肉を買うようにしています。先生からのメッセージと受けとめ、良質の肉を食べて長生きをしたいと思っています。

### 「物理の先生」の余談

昨今、自殺が急増しています。自殺と聞くと、高校の物理の「運動の法則」の授業を思い出します。建物の高さで、落下の速度を計算する試験がありました。先生は、授業中何度もこの計算を教えた後、試験にも出したのです。「最終的に自殺できるか」というのです。私は、この問題が得意でした。

しかし、試験の解答用紙には×が付いていました。疑問に思って職員室にテスト用紙を持って行ってみると、×の理由は単純な事でした。「この数字は何だ。君の体重が二十四キロということはないだろう」と言われたのです。「私の体重は二十四キロです」と言うと、職員室にいた先生方が大笑いした。そして、マルをもらって帰宅した。ちなみに当時、背の高さ百四十センチ、靴は二十センチ、ウエストは五十八センチの高校生で、やせていて背が低いので、発声練習をしなくても高い声がいくらでも出た。

物理には方程式を使った計算がいろいろあり、得意分野でしたが、音楽大学に進んだ私は、その後、物理とは縁遠く、ほとんど何も覚えていません。ただ、テレビニュースで自殺と聞くたびに、物理の授業を思い出し、「ビルの屋上から飛び込む自殺は、体重が軽くても死ぬ事ができるが、絶対にしてはいけない」と、むきになるのです。

## なさけない話

小学校の頃の事も、ほとんど覚えていません。思い出したくないのです。思い出するのは、「なさけない話」ばかりです。

### 回旋塔のある小学校

入学した金田村立金田小学校は木造で平屋の古い校舎でした。私が小学校三年生の時、大井町立大井小学校として、大井町の中央部に移転し、元の敷地は「ヤオマサ大井町店」となっています。校庭には回旋塔という遊具と、二宮金次郎の石像、運動場の中央には大きなクスノキがありました。

回旋塔には、鉄の輪が十個ほどついていて、それにつかまってぐるぐる回る遊具です。輪の数だけ子供がぶら下がり、勢いがつくと全員が空を舞った。美しい光景だった。しかし、片手で輪を握っているのに、疲れた子が手を放して、その場から抜けると、その子の握っていた鉄の輪が次の子の頭や顔面に当たった。コブやアザができ、大泣きをしている子供がしばしばいた。先生や親といった大人たちは平気であった。

今では、ありえないことです。教育問題として取り上げられそうな事ですが、「やめにしよう」と言い出す者はいなかった。他に取って代わる楽しい遊び道具がなかった。

私は、だれもいない時、そっと輪に手をかけようとしたが、背が小さかったので、手がとどかなかった。回旋塔は見ているだけとなった。鉄の輪に、大勢の子供がつかまって空を舞う、青空に開く大きな人の傘は、歓声と共に楽しそうだった。

二宮金次郎像は、大井町中央公民館の庭に移築されています。朽ち果てそうです。

運動場のクスノキを一周するリレーではクスノキで見えなくなった後、順位が入れ替わっているほど大きな木でした。運動会の思い出はありません。この頃、やっと自

転車に乗れるようになりました。私は運動が苦手でした。

## ユリの花の転校生

二年生の時、転校生が来ました。私はこの子と毎日遊んだ。ある日、「お母さんに花をあげるから、山に採りに行こう。一緒に行って」と言い出した。二人で山に入り、ユリの花を採った。ユリの花はいたる所に咲いていて、抱えきれないほど採った。

その子の家に行くと、だれもいなくて、玄関を入ると畳からカビ臭い臭いがした。家全体がジメツとしていて、薄暗かった。昼間だというのに電気をつけると、仏壇があった。お母さんの写真は、黒い紋付の着物姿だった。ユリの花を手向けた。真剣に手を合わせた。二人で正座をして、長い間、手を合わせた。無言だった。言葉を出したら泣きそうだった。何を話したらいいのかわからなかったから黙っていた。沢山のユリの花は部屋中に香った。

今では、ありえないことです。子供が二人だけで山に遊びに行くのを、親が許すはずがありません。事件や事故にあったらどうしますかと言われるだろう。

しばらくすると、お父さんの仕事の関係とかで、また転校して行ってしまった。ユリの花の咲く山は、第一生命本社ビルの建設のため、上部が削られ、その土は大井小学校の埋め立てに使われた。大小の石に混じって土器や石器の破片が沢山あった。

## 同級生は童謡歌手

二年生の時、クラスに良い声で歌う女の子がいた。帰りの時間に先生が、「繁子さんに歌を歌ってもらいましょう」と言われた。彼女は立って童謡『やさしいお母さま』を歌った。「わたしがおねむになったとき やさしくねんねん こもりうた。シーンと静まり返った教室に鈴を転がしたような美しい声が響いた。いつもは暴れている男の子たちも聴き入った。その声は、今でも耳に残っています。それが、毎日続いた。



私たちは、その子の歌を楽しみにしていた。彼女のお兄さんは、ピアノが上手で、私の家のピアノを弾き、青年団の人たちにコーラスを指導していた。当時、ピアノのある家は私の家だけでした。母がその家の人と知り合いだったので、ピアノと場所を貸したのでしょう。その家は近所で石炭屋をしていた。お兄さんは私にもピアノを教えてくださいました。その教え方は古くて、間違えた所を何度も弾かされました。繰り返し、それは熱心に教えてくれました。子供は、うまく弾ける所を得意になって弾きたいものだという心理がわかっていませんでした。お兄さんが弾いて見せてくれた長い細い指先を今でも覚えています。ピアノの音を「美しい」と感じたのは、その時でした。

後日、そのお兄さんは、演歌歌手の北島三郎がアメリカなどで公演する時のアレンジをする人になった、と聞いた。

この思い出話を夫にすると、「その女の子は『やさしいお母さま』だけがうまかったのではないか。今はどうしているんだろう」などと言った。私の数少ない思い出を壊した。

## 紅白の餅を拾う

三年生になると大井小学校が建ちました。建て前の儀式があり、神主さんが祝詞をあげ、儀式をとりおこなった。竹で作った矢が立てられた二階部分に町長や校長や役員、棟梁、仕事師さんたちが登り、そこから紅白の餅を投げた。下にいた私たち生徒は我先にと拾った。近所のおじいさん、おばあさん、父兄も我先に拾った。抱えきれないほど拾った男の子は自慢をして見せた。その餅は、大きさが揃っていなかった。今まで見た事もないほどの厚みがあった。お供えしてあった鏡餅を切り刻んだのではないかと思う。わが家の餅は薄かった。みんなが抱えきれないほど餅を持っていたのに、私は一つも拾う事ができなかった。一つも拾えなかったのは私だけだった。「分け

てあげようか」という子もいなかった。それでお祝いの儀式は終わった。

今では、ありえないことです。今の教育は、平等をモットーにしているので、先生が、まず餅の数と子供の数を数えて平等に手渡します。二つずつとか、三つずつとか。我先に食べ物を拾わせたり、もらえない子が出るような教育はしません。だから、根性が育ちません。なにくそという精神が育ちません。待っていれば手に入るのに努力をするでしょうか。私は、この拾えなかった餅の事を、しっかり覚えています。

## 体育館開き

卒業を前に体育館ができました。体育館開きには体育大学の学生が招待されました。男子は白のユニホーム、女子は水色のレオタードを着ていました。私たちは、レオタードを見るのは初めてでした。本当に珍しく、恥ずかしい気持ちもありましたが目をこらして見ました。

男子は手に粉をつけて鉄棒、平行棒、跳び箱、床運動を披露してくれました。最後に天井から下がっている吊り輪をしました。大車輪が成功すると歓声があがりました。吊り輪は、その後使われることはありませんでした。天井にヒモで括られ、忘れられました。

レオタードの女子は、縄やフープ、ボールを使った集団の演技を披露してくれました。ボールがあちこちに転がり、小学生の方にまで来ました。下手でした。しかし、私たちはレオタードの選手の演技に拍手をおしませんでした。

今では、ありえないことです。体操クラブで、あれくらいの演技なら小学生でもこなします。でも、当時は本当に珍しかったのです。

水洗トイレが一般家庭にはなく、やっと学校や公共施設に設置された頃のできごとです。

## 『光あらたに』を歌う

遠足でバスガイドさんが言った。「今度は、みなさんに校歌を歌ってもらおうかな。」  
私たちは困った。小学校は新設だったので校歌がなかったのだ。先生が、「そうだ、『光あらたに』を歌おう」と言った。男の子も大声を張り上げて元気に歌った。全員歌えた。バスガイドさんが、「うまい、うまい」と、ほめたので、二番も三番も歌った。調子に乗って歌い続けた。クラスの心が一つになった。

みんなが歌えたのには理由があった。神奈川県民歌『光あらたに』は、公募で一等になった歌詞に作曲されたもので、当時、各集落には有線放送があり、朝晩流れた。毎日聞かされれば覚える。それで、小学生でも歌えた。歌詞の中に「富士」や「湘南」が読み込まれている。神奈川県の中の地域からも「富士山」が見える。「湘南」は県民の自慢だ。

そんな風で気に入っていたはずの県民歌も、今日、童謡の会員と歌ってみると、歌詞も曲も、あきらかに古い。みんなが大喜びして「なつかしいね」「久しぶりに歌えて、うれしいね」「いいね」と言っているのに、「新しい県民歌を作ろう」とは言えなかった。童謡の会の終了後、真鶴の童謡の会の会員からは、「海の幸です」と言って干物をお土産にいただいた。粋なはからいに、「古い歌だ」とは、ますます言えなくなった。シンガーソングライターのはなわ君が『神奈川県はなわ』という歌を作った。「そもそも神奈川という川はない。桜木町には、それほど桜の木がない。校内暴力、ダントツ日本一。暴走族の数は、なんと世界一」と歌っている。神奈川県をよく知るローカリティあふれた歌だが、品がない。

一方『光あらたに』は、作られた時代(1950年)の状況を反映して、歌詞には「希望」「理想」「平和」という信念が、「光」「雲」「風」「緑」という美しい言葉で彩られ、県

の明るい未来が歌われている。曲は行進曲調で元気がいい。日本人は、このような曲が大好き。これが自分の住んでいる県の歌となれば、古くても愛してやまないのは当然でしょう。

神奈川県民歌「光あらたに」

作詞 村瀬輝光、補作 勝承夫

作曲 飯田信夫

一、光あらたに 雲染めて

七つの汐路 真向いに

国のあしたの 窓ひらく

ああ神奈川は おおらかに

希望の虹の 立つところ

二、風も輝き 富士映えて

ながめもはるか 湘南は

永遠に心の 故郷よ

ああ神奈川は あたたかい

理想の友の 寄るところ

三、緑はてなく 野に燃えて

実りの夢の わく朝は

ああ神奈川は なつかしい

つづく海辺に 海の幸

平和の花の 咲くところ

## 「白い鳩」の仰天

「みんなで歌おう 夢にとどくまで」が、私の童謡の会のキャッチフレーズです。そして、「青い空に 白い鳩を飛ばして 歌おう」と会員に呼びかけて童謡の会を展開している。心のおもむくままに歌って二十年以上が過ぎた。つまり、自分流の童謡の会です。

ある日、奈良県の一般の人が私の年賀状を見て、「青い空に 白い鳩を飛ばして 歌おうというのは何ですか」と聞いて来た。この言葉は、私が作ったのだから無理はない。童謡の会員は私の話になれていて、そんなものだろうと思っているから、訳がわからなくても真剣に聞きただして来る事は、まずない。私の事を理解してくれている。ありがたい事です。

小学校の運動会は、秋晴れの日曜日だった。決まって晴れた。昼に鈴割が全校生徒であった。金と銀の大きな鈴に赤と白の布製の球を当てた。これが、なかなか割れなかった。小さかった私は、球を投げつけても、一も当たらないばかりか、自分が落ちてくる球に当たってボコボコになり、泣きそうになった。我慢した。一方が割れると、全員で割れていない方に球を当てた。観客の大人も加勢した。その場にいた人の心が一つになった。

鈴が割れると中から標語と紙ふぶきと共に、白い鳩が飛び出した。十羽ほどの白い鳩は、群れをなして青い空を二回、三回と旋回すると、いなくなった。それは、輝いて見事だった。この清々しい風景が切り取られ、いつも心にあり、歌を歌う時、よみがえるのです。鳩は、近所のお兄さんが飼っていたのを先生が借りて来て入れたものだと思ったのは、ずっと後になってからの事です。鳩は運動場を旋回した後、小学校の西側にあったお兄さんの家に帰って行った。

大学生になった次女にこの話をした。すると、「お母さん、普通の鳩は白くないよ」と言った。「エッ、私は仰天した。「鳩は白と思っていたの?」。「手品師も、帽子から白い鳩を出すし、鈴割の鳩は全部白かった」。すると夫が、「それは、遺伝の関係です。普通、公園にいる鳩はネズミ色をしている。突然変異で中に一羽ぐらい白いのが生まれる。手品師やお兄さんは、特別に選択した白い鳩を使っていた。飼っていた」と詳しく説明してくれた。説明されればされるほど落胆は大きかった。

輝く青い空に羽ばたくのは白い鳩でなければならない。「青い空に 白い鳩を飛ばして 歌おう」

### 「いじめ」はあった

学校には行くものと思っていたから、小学校には毎日決まった時間に行った。いじめはその頃にもあった。私は本当に小さかったので、いじめのターゲットにはちょうどよかったに違いない。先生や親は知る由もなかった。

『憲法記念日』、『子供の日』、『母の日』がある五月の童謡の会の例会で、「今も、いじめが絶えませんが、私が小学生の頃にも、ありました。私はゴミ君とクズノ君にいじめられました」と話すと、内容を話さない内に「ゴミとクズじゃあないの」と声がかかり大笑いになった。中には「きっと、その二人は、先生の事が好きだったのよ」という人まであり、「そうねえ」と勝手に話がまとめられ、簡単に片づけられてしまった。私が小学校時代に受けたいじめは、この程度だった。

### 卒業式は『しかられて』

完成した体育館で卒業式が行われた。校歌がなかったので、歌というものの練習はなく、歌は何も歌わなかった。歌は忘れられた。

卒業式の入場、退場、卒業証書授与のあいだ中、童謡『しかられて』のテープが流

れていた。代表者が、すすり泣きながら別れの言葉を読みあげた。すすり泣いていたので、一挙に卒業式らしい雰囲気になった。みんながもらい泣きした。卒業式の後、「マーちゃん、よかったよ」と誰かが言うと、「俺さ、今日、風邪ひいてんだよな」と言った。彼は、万年級長だった。卒業生は全員が同じ中学に行ったので、泣く必要がなかったのだ。私だけが東京の中学校に合格していた。「お別れ会をするか?」と先生が聞いて来たので、「いいです」と断った。卒業式は何の感情、感動もなく過ぎた。この思い出話を夫にすると、「卒業式の曲が『しかられて』だなんて、すごいね。だれが選曲したのでしょうか」と、どうでもいいことを、しきりに不思議がった。

## 席を譲る

中井町の童謡の会の帰りに秦野駅行きのバスに乗ると、二十人ほどの小学生が先に乗っていた。私を見ると女の子たちが小声で相談をはじめた。

「お年寄りには席をゆずるんだよね」「そうだよ、どうしようか」。私はふき出しそうになった。(聞こえているよ)。

すぐに、女の子の一人が、はにかみながら近づいて来て、「こちらへどうぞ」と、手で自分が座っていた座席を示した。新聞の投書欄で「年寄りでもないのに席を譲られ、不愉快だった」とか、「席を譲っても、その老人は最後まで座らなかった」などあるので、自分の時は、どうするか考えてあった。いよいよその時である。私は、「すみませんね。ありがとう」と言って座らせてもらった。なるべく年寄りっぽい声を出した。

かわいい女の子たちの間に、チビデブの私が座ったので、みんなきつそうだった。またふき出しそうになった。「わいわい、がやがや」口々に何かしゃべっている。楽しそうだ。私も、うきうきした気分になった。小学生たちは、秦野赤十字病院(秦野市立

野台一丁目一番地)の手前の公園広場前で全員降りた。女の先生が、全員降りたのを確認して、お金を払うのに手間取った。先生は、「申し訳ありません」と一礼して降りた。校外学習なのだろう。

ところで、私は席を譲ることはあっても、譲られるほどの年齢ではない。まだ、五十代(現・平成十七年)です。私を見た小学生たちが「お年寄り」に見えたのは、きっと私が次のような格好だったからでしょう。

黒い帽子を被り、マスクをし、黒いオーバーを着て、黒いリュックを背負い、右肩から茶色のショルダーバックを下げ、左手にテープレコーダーと模造紙の束、右手には紫色の鞆と、「めずらしいから、先生に一つ」と言っていた綿の木を持っていた。自称「荷物人間」。この日は、綿の木を持っていたので、特別派手でした。これでは、席を譲らないわけにはいかない。

この事は、とてもうれしくて、しばらくは、各地で講演を頼まれるたびに話しました。「私は決して年寄りではない」事を強調して話すと、どこの会場でも笑いを取ることができました。

女の子の「こちらへどうぞ」と言う優しい声、きれいな手のひら、にぎやかなバスの中の様子が昨日のことにように思い出されます。「小さな親切」が、心にあたたかく残っています。しかし、私は、まだまだ「バスや電車では席を譲ろう」と思っています。

## 間違った認識

### 「保育士」への認識

ある奥さんの言葉、「うちの嫁は保育士をしている。帰宅すると、自分の子供を寝か



しつけながら一緒に寝てしまう。保育園では、子供を遊ばせているだけなのに、私は、その奥さんの保育士に対する認識に驚いた。保育士は、子供の命を預かる仕事です。遊ばせているだけではありません。一瞬も気が抜けません。他の人も、保育士に対して、これだけの認識しかないのなら、あまりの事です。それとも、ここの家庭内では、嫁と姑の問題がこじれているのでしょうか。

### 「散歩」への認識

老人ホームで介護士が、「山川さんは、外を歩かせる必要があるのかわからない」と言っているのが聞こえたので、その認識に驚いた。

紫外線は、沢山浴びると癌になる事がわかってきました。しかし、日光に当たると骨が丈夫になります。散歩は気分転換にもなります。老人ホームでは、歩ければ自由に外出して散歩できますが、ほとんどの人がしていません。家族が見舞いに来て、散歩をさせる場合もありますが、介護士の数が少ないので、散歩は計画に組み込まれていません。無理に外に連れ出して転んだら大変です。老人ホームには、百人もの人が入居しています。

介護士が、本当に「入居者は外を歩かせる必要がない」と認識しているのなら問題です。

### 「レジ袋」への認識

C 2削減に協力という事で、「レジ袋はいりません」と言うと、「恐れ入ります」とか「ありがとうございます」とレジの人が言う。

しかし、買物かごの中には、時々レジ袋が入っている事がある。計算をしている内に、言われた事を忘れてしまうのだろうが、環境保護のためレジ袋が不要なのだとは認識していないむきがあるように思う。

## かげひなた

「かげひなた無く働く」とか、「裏表のない人だ」という言葉がある。しかし、人間は本当に「かげひなた無く」、「裏表がない」のだろうか。

ある会社に行くと、受付の人がせっせと働いている。上司から言われた事は「はい」と言ってこなし、来客には「いらっしゃいませ」と笑顔で接している。よく働く人だなあと見ていた。ところが、ある日の午後、誰もいない時間帯に行くと、その受付嬢は、机に突っ伏して昼寝をしていた。会社、学校、病院、介護の現場で、人が見ていない所で、その人の人格が問われる。誰も見ていない所でも正直に生きることは、なかなか難しいのではないだろうか。

## ボランティア

童謡を歌うボランティアをしています。老人介護施設で、童謡や唱歌を歌っています。会場に集まった高齢者は、どの人の顔も無表情です。元気のない顔です。悲しい顔、おこった顔の人もあります。私たちボランティアが入って行くと、拍手がおきました。そして女性の方が、「今日はキレイな人ばかりが大勢来てくれて嬉しいよ」と言いました。みんなが一斉に笑いました。さっきとは、全然違う明るい活気のある表情になりました。ボランティアの人も笑っています。「キレイ」と言われて嬉しかったのです。私などは、自分の事かと勘違いしたほどでした。

介護施設で童謡の会が始まりました。「これから、童謡や唱歌を、みんなで歌います。知っている所を口ずさんでください」と言うと、瞬時に「童謡ケ。幼稚っぺえなァ」と男の人の声がかかりました。ボランティアを始めたばかりの若い頃は、このような場面では、めげたり怒ったりしてしまいました。しかし、しだいに痴呆のある人の発

言と思えるようになりました。痴呆が発症すると、自分をコントロールできなくなります。

みんなで『砂山』を歌いました。「北原白秋が新潟に行った時のようすを詩にしたものです。日本海の向うには佐渡が見えます」と解説すると、なんと、「童謡は幼稚」と言った男の人が、「自分は新潟の出身だ」と言い出しました。みんなが「へー」と言うと、ひとしきり雪国の思い出話をしました。得意顔です。生き生きとした表情です。聞いている人たちも、その話に引き込まれ、熱心に聞いています。私が住んでいる足柄地区は、冬に雪が降らないので、雪国の話は、非常に興味深い話だったのです。その男の人は、ついさっき、「童謡は幼稚」と言った事など、すっかり忘れて上機嫌です。

私は、以前にはめげたり怒ったりした事を反省しています。若い頃は高齢者を全く理解していなかったのです。歌を教えるより、はるかに重要なことでした。高齢者の前で、ピアノがうまく弾ける、歌がうまく歌えるという事より重要なことです。

童謡のボランティアは、ステージで歌ったり、施設利用者の隣で歌ったりします。この日は、向かい合って座って対面形式で歌いました。

ピアノを担当した若い先生が、「会話が弾んでいましたね」と言うほど、歌と歌の間で、言葉が交わされました。「昔はこうだった」「姉がこう言っていた」「学校の先生がね」など、しゃべりながら笑顔がこぼれます。ボランティアは、一緒に歌ったり歌詞集のページをめくるだけでなく、会話をすることも大切だと教えられました。

歌って行くうちに、みんなの表情が活気に満ちてきました。若々しい表情です。「楽しかった」「また歌いに来て下さい」と口々に言って手を振りました。出入り口まで見送りに来る人もありました。ボランティアの一人が「歌の力ってすごいですね」と言った。

## 知恵袋

マーケットのレジで渡されたビニール袋が開かないで苦戦していた所、隣にいたおじいさんが、開け方を教えてくれた。「え？もう一回」と言う私に、もう一度やって見せてくれた。「スゴイ。手品じゃないですか」と感激していると、その老人は、「どうだ。まいったか」という顔をした。それは思いがけないできごとでした。私は出会う人に次々と「ビニール袋の開け方」を伝授した。童謡の会でもやって見せた。これは、まさしく「新・おばあちゃんの知恵袋」です。その事が嬉しかった。

ビニール買物袋の開け方を、お試しください。簡単です。まず、右手で「右の持ち手」を持つ、左手で「中央」を持つ。次に、左右の手を引くと、内部から が現れる。それで簡単に開く。

ある日、私が得意になって伝授していると、おばあさんが近づいて来て、「右の持ち手と左の持ち手を引っ張ると、もっと簡単に早く開くわよ」と元気に言った。これは荒っぽいですが、この方が早い。

時代は、どんどん進んでいます。時間との闘いです。買い物も、あわただしくなりました。「おばあちゃんの知恵袋」も、新しくしていかなければいけない。

## 飼育

平成十七年(2005年)三月、最後まで長生きをしていたアフリカツメガエルのコセキ君が、死んでしまいました。「私が、おじいちゃんの入院で忙しくて、水を交換するのを一日延ばしにして、面倒をみてやらなかったからだよ。ごめんよ」「そんな事はないよ。寿命だよ。生き物はみんな死ぬ。これまで五年もよく面倒をみたよ。十分だよ」と夫が言った。

五年前、夫が横浜青少年センターの人から三十匹ものアフリカツメガエルのオタマジャクシをもらって来ました。そのオタマジャクシは、普通より大きく体が透けていました。そのため、茹でたホウレン草を磨り潰して与えると、みるみる体がグリーンになりました。

アフリカツメガエルは、掌より大きくなり、実験用に使われるものです。大きければ解剖しやすい。テレビでは、イタリア料理の雑炊に入れていました。美味しいのでしょうか。

ところが、うちのアフリカツメガエルは、足や手が生えてカエルの形になっても、普通のアマガエルの大きさ以上にはなりません。「餌は、オキアミだけでは、栄養が足りないのかな。それとも飼っている場所が原因かな。はて、わからん」と高校の生物の教師である夫が首をかしげました。玄関で衣装ケースに水を十センチほど入れて飼っています。彼らは一日中底に沈んでいます。時々思い出したように水面に空気を吸いに来ます。あとは、シーンと静まり返っています。

夏が来ると、少し大きくなったカエルは次々と死んで行きました。アフリカという名前に似合わず暑さに弱いようです。一日一回全部すくい出し、新しい汲み置きの水と交換しました。

四年目に入ると三匹になりました。この三匹の運命は、私の飼育にかかっています。一番大きいのはオオゼキ君。元気がいいのはユタカ君。これから大きくなるのはコセキ君。コセキ君は、オオゼキ君のように大きくなれるでしょうか。美味しく食べられるように大きくしたいと思いました。でも、ユタカ君は、クリスマスの夜に死んでしまいました。私が『第八回・歌は友だちコンサート』の準備に忙しくて面倒をみてやらなかったためです。オオゼキ君は、元日に死んでしまいました。今シーズンは、め

ずらしく雪の降る寒い冬です。寒さにも弱いようです。大きな白いお腹を上にして両手をバンザイして死んでいきました。腹にはヘソがありません。カエルだからです。

残ったのはコセキ君でした。一人ぼっちになったコセキ君は、時々ケロケロ、ケロケロと鳴いています。それは、本当に夜中、耳を澄まさないと聞こえないほどの細かい声です。真赤な大きい太陽の沈むアフリカを思って鳴いているのでしょうか。

「アマガエルの大きさからぜんぜん成長しなかったから、長生きしたんだ」と生物教師らしく夫が言いました。これは重要な事かもしれません。ある朝、コセキ君は、生きている時と同じ姿勢で死んでいました。「まだ生きているよ」と言っているように。もっと生きたかったのでしょうか。コセキ君の魂は、わが家の周りを三回まわって、夢に見た遥かなるアフリカの大地に帰って行ったのでしょうか。

「彼らは、日本生まれの日本育ちだから、アフリカなんか知らないよ。第一、霊魂などといったものは、ありえない」。夫は科学者なので、まともな事を言って夢を壊しました。

私の家で過去に飼った動物を紹介します。犬、猫、鶏、九官鳥、カラス、カナリヤ、シマリス、山羊、兎、亀、鯉、金魚、メダカ、カマキリ、カブト虫、モンシロチョウの幼虫、蝉の幼虫、モグラ、蟻、タランチェラ(世界最大の蜘蛛)の子供、フタホシコオロギ。

プラナリアは、最初の子供が死亡したので、その代わりにレバーを餌にして飼いました。特別太っていて「まさお」という名前でした。その後、娘が二人誕生しました。

本当にいろいろな動物を飼ったものです。子供たちは大喜びでした。こうして育ったので、蜘蛛を見ても驚きませんし、モグラの餌のミミズを指でつかんでも平気です。動物との触れ合いは、心を寛大にさせてくれます。私は、アヒルにペンギン、ポニー

それにラクダやゾウも飼ってみたいと思っています。

## テニス

大学では「テニス」で体育の単位を取得したが、ほとんどルールを理解していなかった。スポーツは苦手だが、観戦は好きです。

平成二十二年(2010年)のある日の夜中、テレビをつけてみた。するとウインブルドン選手権のテニスの試合中継であった。なかなか決着がつかないので風呂に入った。風呂から出て、またテレビを観た。すると試合は続いていた。なかなか決着がつかないので寝た。

翌日の夜中、またテレビをつけて観た。すると、また試合をしていた。なかなか決着がつかず風呂に入った。風呂から出ても試合は続いていた。どちらが勝ったのだろう。何が何だかわからないままとなった。

一年後にわかった事だが、平成二十二年の結果は「芝の王者」ロジャー・フェデラー(スイス)がランクの低いトーマス・ベルディハ(チェコ)に負け、ラファエル・ナダル(スペイン)が優勝で、トーマス・ベルディハが準優勝だった。

平成二十三年のある日の夜中、テレビをつけてみ。するとウインブルドン選手権のテニスの試合中継であった。前年の優勝者ラファエル・ナダル(スペイン)と、今度はノバク・ジョコビッチ(セルビア)の試合だった。なかなか決着がつかず・・・ナダルが二つ負けて疲れているようだった。翌日の新聞には女子のペトラ・クビトバ(チェコ)対、コリア・シャラポワ(ロシア)の対戦で、クビトバが優勝と大きく出ていた。美人で、モデルのように手足が長く大きな人だ。翌々日の新聞に、ノバク・ジョコビッチ初優勝の記事が小さく載っていた。

優勝賞金は百十万ポンド(約一億四三〇〇万円)。選手が、これほどまでに頑張るのも、家族が必死で応援するのも、なるほどと納得した。テニスは、三時間近くの体力勝負のスポーツ、観戦者も我慢強い。テレビ観戦も途中で水を飲んだり、タオルで汗をふいたり、トイレに行ったりと忙しい。

音楽大学では、体育の授業は「テニス」が中心だった。突き指などをさけるためです。「登山」などの合宿に参加すると、いっきょに単位を取得できたが、私と私の友だちは、地道に「テニス」の授業を選択した。「テニス」が好きなのではなく、合宿に行きたくなかっただけ。合宿に行く支度が面倒だった。

体育の単位は、四年生までかかってやっと取得できた。最後まで残ったのは十人ほどで、大学院の器楽科に合格しているのに、体育の単位だけがまだ取得できていないという男子もいた。先生が心配して「お前、すごいじゃないか。なんの楽器だ。体育の単位が無いと卒業できなくて、せっかく受かった大学院もダメになってしまうな」と言った。「フルートです。体育だけ単位を忘れていました」。

「今日は外は寒いから体育館でバトミントンだ。ネットを張って二人組でやるように」と言って、体育の先生は指導などせず、いなくなった。私たちは、ぐずぐず、のろのろ、やる気なくネットを張ったので九十分の時間の大部分をついやして、ほんの少しだけ打つまね事をした。「兄が大学のバトミントン部に所属していて、こんなふうに家で素振りをやっている」と言い出した子がいて、その子の素振りのまねを、みんなです。左手を大きく前に出して右手のラケットで打つまねをした。ネットは山のようが高く、小さな私は向こう側に打つことが一度もできずに終わった。バトミントンは、小学校の正月の遊び以来の事だった。



この話を夫にすると、「なんて情けない話なんだ」と言った。「でしょう。面白いから書きとめておこうかしら。こんな話なら、いくらでもあるよ」、「音楽大学残酷物語でも書いたら、ベストセラーになるよ」、「それって私がバカということを証明しているようになるから、いやよ。一世を風靡した『のだめカンタービレ』という漫画の二番煎じになるわ」

結局、私と私の友だちは、バドミントンとテニスで体育の単位を取得し、音楽大学を卒業できた。フルートの男子がどうなったかは定かでない。有名なフルート奏者になり活躍していてもわからない。なにしろ一度しか会っていないし、名前を知らないからだ。

## 合唱練習

### 「音楽大学」での合唱練習

生徒に人気の先生がいた。大学で人気のある先生とは珍しい。私も好きだった。音楽をする他の先生は、ガツガツしていて神経質な人がほとんどだったが、その小松先生は、だれよりものんびりした人だった。がっしりした体格の人だった。ハンサムであった。

私たちの学年は、「不作の学年」といわれ、教授陣からバカにされていた。選ばれた合唱曲はつまらないミサ曲で、だれもが歌いたくなく、なかなかまとまらなかった。指導の小松先生が「これでは、発表会ができない」と嘆いた。すると、まじめな男子学生が発言した。「それぞれのパートが責任を持って、家で練習をしてくるようにしたらどうですか」と。「なるほど」とみんなが思ったが、小松先生は意外な事を言われた。「テノールの君は、まじめで練習をしてこようという気があるけれど、実際、合唱と

は、みんなが集まって練習するものだ。相手の声を聞き合ってハーモニーを作る。これが合唱のダイゴミなのだ」と。「なるほど」と、またみんなが思った。結局、ミサ曲はまとまらないまま終わった。

思えば、本当に能力のない学生の集団だった。「やる気がない」と言う以前の問題だった。音は取れない、イタリア語はできない。ミサ曲が何であるか、よく知らない。しかし、当時は、まとめる先生に力がないのだと決めつけて、はばからなかった。

さらに、小松先生が指導していた副科のオーケストラも、なかなかまとまらず、一曲もまともに完成しなかった。私は副科でバイオリンをやっていたが、今は全く弾けない。

ところで、現在、私は童謡の会を主宰している。童謡や唱歌を調査すると、必ず小松耕輔の名前に出会う。童謡『お山の細道』「お山の お山の細道は だれだれとほる だれとほる」の作曲者だ。高齢の人なら誰でも歌える童謡です。昭和五年(1930年)には小松耕輔編『世界音楽全集』11(春秋社)を編集している。当時は本居長世と並ぶ音楽界の重鎮だった。私は音楽大学の学生だった時、「小松先生の親は、偉い音楽家だそうだと聞いたように思う。私たちが好きだった小松先生の親が、小松耕輔なのだろうか。私は音楽大学で教えを受けた小松先生の名前のほうを覚えていない。私たちは、本当に「不作の学年」だった。

### 「男声合唱団」での合唱練習

夫が作曲家の中島はるさんのコンサートに行った。「どうでしたか」と聞くと、「とてもよかった」と言った。プログラムを見るとラストは清水脩作曲の『山に祈る』だった。十六人の男声合唱団。ピアノは中島はるさん。

「聞かせ所が随所にあって、この曲はいいよ。男声合唱曲の定番だよ」「僕は昔、楽譜

を買って自分で練習をした。だから歌える」と夫が得意そうに言った。

プログラムには次のように書いてあった。「メンバーは現在十六人で小規模ですが、練習時の指揮者の容赦ない厳しい要求にもよく耐えながら、・・・男声合唱の魅力を改めてお聞かせしようと張り切っております」と。

「練習は厳しく、何回も同じ所を歌わされ、泣くようで、自分たちは面白くない。しかし、最後の最後に声一つにまとまり、コンサートホールに響くと、客が感動してくれ喜んでくれる。それが合唱の醍醐味さ。練習の時なんて、一つも楽しくないものさ」と夫が合唱練習についてのウンチクを述べた。そして、「この合唱団は、ちょっと、年を取った人が多かったな」とも言った。

「私が知っている男声合唱団は五十人ぐらいいるけれど下手だわ。最初の指揮者の頃は、とても上手かった。でも厳しかったから人数がドンドン減ってしまった。次の指揮者は、歌は楽しく歌うをモットーにしているので、みんなで楽しくハモって団員が急増した。人数が多くても下手だわ。指導者に問題があるのかしら」「歌う人が楽しくやっているような集団では、だめだね」「そうかなあ、合唱は歌う人も楽しくが、私の音楽大学のモットーだったわ」「合唱団は、自分たちが歌って楽しむだけではなく、聞く人にも感動と喜びを与えられなければ、だめだね」。夫は意見を変える事はなかった。

音楽は心をワクワクさせてくれる。歌う人も聴く人も楽しいのがいい。「金賞なんか取らなくていいよ」と、私は思っている。音を楽しむ。音楽の楽しさを、みんなに伝えたい。

## 音楽教育

音楽大学での卒論は、小山章三教室を選択した。友だちが「面白そうよ」と言った

ためです。一回目の授業は自己紹介で、教授は自分の名前「小山章三」を黒板に漢字で書き、「左右対称です」と言った。続いて住所を書いた。「市川市」番地まで左右対称だった。さらに電話番号を書いた。これも左右対称だった。珍しかったので、その場で全員の学生が教授の名前と住所と電話番号を覚えた。

ある日、一曲の合唱曲の楽譜が配られた。「初めて見る曲と思うが、これを指導するには、まず、何をなすべきか」と問われた。何人かの学生から意見が出た。「歌う前に発声練習を徹底的にする」「歌詞を読み内容を理解させる」「各パートの音取りをしっかりする」など。

しかし、教授は意外な事を言われた。「この合唱曲を指導するには、まず自分が勉強し、曲を十分理解することだ」と。私は、もっともだと感動した。そして教授が推薦する山住正己・園部三郎著『日本の子どもの歌』(岩波新書)を買って読み、さらに感動した。ここで、「唱歌教育成立過程」の勉強に進めば、現在自分で勉強している「童謡や唱歌の研究」に直結していたのだろうが、当時はそのような考えがなかった。明治唱歌は面倒とかたづけてしまった。悔やまれてならない。今日、『日本の子どもの歌』を本棚から出してページをめくると、鉛筆で線が沢山引いてあった。私は本を読む時、大切な所に線を引きながら読む癖があった。大学時代も勉強をしていた。

また、秋をテーマにした合唱曲の作曲の宿題があり、混声四部合唱を作曲して提出すると、特別に呼ばれて、「なかなかいい」と言われたが、それは讃美歌の真似だったから、今ではどのような曲だったか覚えていない。覚えていないくらいだから、たいした曲ではなかったはずなのに、ほめられたという事だけを覚えている。私は中学生の時、学校で讃美歌を歌う時間があったので、似たような物を作るのは簡単だった。

小山章三先生は、日本基督教団の讃美歌 244 番「COME TO ME 我にきたれ」の

作曲者です。「枕もとで出来上がったこの曲を歌うと、たちどころに女性の病気が治った」と授業中に先生が話されたのを覚えている。その女性は奥様。奥様への愛が込められた一曲です。「行けども行けども ただ砂原」。

「ところで、卒論はどうなったの?」と夫が聞いた。卒論は、横浜の女声合唱団にアンケートを出し、それをまとめた。女性の体と発声法のようなもの。「おもしろそうだから受講しよう」と言った友だちも、枚数を何度も何度も数えて論文をまとめ提出した。二人共たいしたことのない論文だったが、それで、めでたく卒業した。論文の内容は、もう何も覚えていない。音楽大学では、四年生になるまでに大勢の学生が退学してしまう。自分の実力に限界を知るためだろう。音楽しかやってこなかった者は、卒業後につぶしがきかない。絶望的だ。私の学年は特に退学者が多かった。私は、よく卒業できたものだと思う。私の友だちも、後日、三十年も過ぎてから電話で同じことを言っていた。

音楽家の坂本龍一が講師となり音楽の魅力を解き明かす番組「スコラ 坂本龍一 音楽の学校」第二弾が平成二十三年(2011年)十月一日からNHK・Eテレで毎週土曜日夜十一時から放送されるのを前に、坂本龍一がコメントを寄せた。それは、次のようです。

「一番勉強になっているのは自分。人に何かを教えるには、自分が一番勉強しなければならないから。それでも常に勉強が足りないと思う」。坂本龍一が言っている事は、小山章三先生の教えと同じなので、私は、この神奈川新聞の記事(2011年9月29日)に釘づけとなった。

## 有名人

卒業した国立音楽大学には、有名人が沢山いました。

### 「天地真理」という有名人

「歌手の天地真理と同学年よ」と言うと、だれもが必ず「えー」という顔をする。私と比べるからだが、私は天地真理に会ったことがない。

### 「四谷文子」という有名人

廊下で会ったのは、着物を着た四谷文子教授。小さい人で太っていた。着物の帯が相撲とりのまわしのようだった。「ハンカチを落としても拾えない」と言う口の悪い学生もいた。レッスン室は、私が声楽を師事していた教授の隣だった。

### 「東京マイスターズ」という有名人

ある日、友だちから歌の試験の伴奏を頼まれた。「私でいいの」と思ったが、「他にだれも弾いてくれる人がいない」というので引き受けた。レッスン室に行ってみると、なんとNHKテレビ『歌のメリーゴーラウンド』で活躍した「東京マイスターズ」のメンバー「及川慎」さん(リードテナー)がいた。な、なんだ!この人、テレビの人だよと思っているうちにレッスンが始まった。友だちの歌は、所々直された。友だちは、それを鉛筆で事細かに楽譜に書き込んでいた。真面目な人だなあと思った。私には「伴奏の人は、もう少し練習をして下さい」と言われた。伴奏は、その時が初見だったので、しかたがなかった。初見でなくても、いつもピアノの練習はほとんどしなくて、レコードや他人が弾いたのを聴いて、マネをして、いい加減に弾いていた。こうかな、ああかなと、自分なりに工夫して弾くのが好きだった。先生に「ここは、このように弾きなさい」と言われるのはいやだった。他人に指図をされたくなかった。自己流で楽しく弾いていた。それで通っていた。

それよりも、「及川慎」先生の、やんわりした指導に驚いた。私がレッスンを受けていた声楽の女性教授は、最初から最後までガミガミどなっていた。「姿勢が悪い」「口は大きく開ければいいというものではない。あなたは開けすぎ。アンパンがタテに入るほど大きく開けると、逆に喉が閉まってしまう」「あそこがいけない。ここがいけない。ガミガミ」と。声楽のレッスンは、一つも面白くなかった。しかし、なぜか成績は良かった。私は体が小さくて細いので、いくらでも高い声が出た。発声練習を夢中でして高い声を出そうとする人がいるが、それは無駄というものです。

後日、私が卒業して夏期講習の聴講生としてホールでの演奏会を見学に行くと、後ろの席から聞いたことのある声がした。「近頃のお若い方は、みなさんお上手ねえ」と。その声は、すでに退職した、私が師事していた声楽の教授であった。私は、飛び上るほど驚いた。ほめる事もあるのだと驚いた。そして、こんなに下手な人達をほめて、どうされたのだろうか心配になった。

東京マイスタージンガーは、NHKテレビ『歌のメリーゴーラウンド』でレギュラー出演し大活躍した。番組が終了すると解散した。「ガチャガチャ・バンド」「ワルツイング・マチルダ」「口笛ふいて」「ピヤ樽ポルカ」「うそなんかいうもんか」などが耳に残っています。この歌番組は、子供たちの心を育み、音楽、特に歌う事の楽しさを教えてくれました。メンバーのひとり、宍倉正信さん(バリトン)が亡くなった事を知りました。

## 「李清」という有名人

オーストリア国立グラーツ音楽大学ピアノ本科教授の李清先生は、国立音楽大学附属音楽高校の時、昭和三十五年(1960年)「毎日学生音楽コンクール」高校の部で第一位になりました。そして一九六二年、ウィーン国立音楽大学に留学。卒業後もウイー

ンで暮らし、世界各地で演奏活動を続けておられます。

日本にも時々帰国されコンサートを開催されました。ラジオやテレビ放送にも出演されました。私は熱狂的なファンでした。ファンレターを何度も出し、そのたびに返事をいただきました。コンサートや放送の感想だったので、返事がいただけたのだと思っています。日本に住んでいた父親も音楽家でチェロ奏者でした。李清先生の奥さんの旧姓は「池田」とのことでした。プライベートな事も書いてくださり嬉しい事でした。手紙は大切にしています。ハンサムなピアニスト李清先生は、ずっと憧れの人でした。

## 「ダンタイソン」という有名人

客員教授には、昭和五十五年(1980年)ショパン国際ピアノコンクールで優勝したダンタイソン先生がおられました。いつも国立音楽大学附属図書館に通って勉強家だったと聞いています。ショパン弾きが多いけれど、流れるようにショパンを弾くのは、ダンタイソン独自の演奏で気に入っています。ベトナム戦争時代、少年ダンタイソンは、ひそかにレコードを聴いて、紙鍵盤で勉強したそうです。小田原でのコンサートを最後にカナダのモントリオールに移住されました。時々日本でも演奏会が開かれます。これからも、元気で活躍されることを願っています。

## ピアノ試験の悪夢

音楽大学の三年生の時のことです。小田急線の上り新宿行きに乗っていた。玉川学園前駅を通過して、トンネルを出た途端、ガッタンと急停車した。大勢の客を乗せたまま動かなくなった。ゆるいカーブで脱線したのだ。放送があり、ドアが開けられ、乗客が次々外に出た。私に手を貸してくれたサラリーマン風の男性があった。その人



につかまって線路に降りた。そして、登戸駅めざして、全員が黙々と歩いた。さらに、同じ時刻に生田駅では下り電車で飛び込んだ人があったようで、線路が血だらけだった。延々と歩いて登戸駅まで行き、南武線に乗り、立川駅からバスで砂川町の国立音楽大学までたどり着いた時には、すでに前期のピアノの試験の時間は終わっていた。

事務所で事情を話すと、明日の作曲科のピアノの試験のラストに特別に時間を組んでもらえることになった。そのまま帰宅し、ピアノの練習をしたが、頭が混乱していて練習どころではなくなっていた。「どうしよう、手が動かない」。夜、横になっても寝つかれなかった。

翌日、作曲科のピアノの試験会場では最後のグループが待っていた。男子学生ばかりだった。中から弾き終った学生が一人出て来て、「めちゃくちゃに弾いた。転回部からサア、このように弾いて、」。次に出て来た学生も、「けっこう長く弾かされた。三ページ目のここからは練習してなかったから」と話していた。私は、完全に雰囲気の中のまれた。

最後の二人が中に入ると、私も入るように言われた。作曲科の課題曲はモーツァルトのようだったが、おや？モーツァルトのソナタではなく、似ているが、違う曲に化けていた。次の人も違っていった。モーツァルトのようで、モーツァルトではなかった。私は「こりゃ、な、なんだ？」と思った。

私の番になった。変なモーツァルトを何曲も聞いてしまった私は、混乱の頂点に立っていた。教育科の課題曲はバッハだった。前半を弾き始めると、あまり弾かない内に手が動かなくなった。先生から、「最悪の時を想定して指に覚えさせておくこと」と言われていたのを思い出したが、後の祭りだった。次が弾けない。バッハだから、メロディーがない。とっさに中間部を省いて、後半につなぎ、終わらせた。最初から弾

き直したり、つかえた所をもう一度弾いたりしなかったのは、友だちが先生からその事で注意を受けているのを見ていたことがあったからだった。

結果は最悪の点数であったけれど、四年生に進級できた。以後、同じ失敗を繰り返さないように、ゆっくり弾いて指に覚えさせたり、いくつかのパーツに分けて暗譜したりと、工夫をした。

その後、思い出すのは、この最悪のピアノの試験の事ばかりで、卒業しても寝汗をかくほど夢でうなされた。それは十年も二十年も続いた。

## 入学と卒業

入学式が終わると、私たちの教室に先輩が来た。そして合唱が始まった。私たちは何事かと驚いた。一曲終わるとリーダーの人が挨拶をした。「みなさん入学おめでとうございます。ところで、なぜ国立音楽大学は、クニタチというか知っていますか。国立という町は国分寺と立川の間にあります。つまり、国分寺の国と、立川の立の字を取って国立です。今は立川市柏町の玉川上水台に校舎が移転しましたが、昔は国立市の方に大学があったので、国立音楽大学という名前がついているのです。コクリツではありませんので、その辺の所をよろしく」と。

私たち新生は「なるほど」と思った。これが、大学で学んだ最初の事だった。先輩たちはクラブ活動の合唱団の宣伝に来たのだった。合唱団は大小たくさんあった。

卒業式での故・有馬大五郎学長の話覚えています。「国立音楽大学には校歌がありません。どうぞ一人ひとりが校歌になり、ここで学んだ事を生かし、全国で活躍し、高らかに花開かせていただきたい。」

自分が校歌となる。思いがけない感動的な卒業式のメッセージだった。この大学が、

のんびりした雰囲気だったのは、教育音楽家・有馬大五郎の教育方針だったに違いない。

## 歌って暮らす

「弾む会話をしよう」「笑い声のある生活をしよう」「歌を歌って暮らそう」。

脳科学の第一人者、茂木健一郎さんによると、「好きな事を楽しむと若々しく生きられる」、「弾んだ会話をすると、前頭前野が活性化される」とのことです。茂木さんの本が大ヒットすると、本屋には次々と別の著者の脳科学の本が並んだ。

おてんとさんの唄

作詞 野口雨情

作曲 本居長世

赤い花 咲いた いい花 咲いた

てれてれ おてんとさん

てれてれ おてんとさん

いい唄 うたほ いっしょに うたほ

てれてれ おてんとさん

てれてれ おてんとさん